

# 地域社会における歴史顕彰の社会的構成

安曇野市三郷中萱地域の事例を中心に

祐成ゼミ所属 03L1045h 塩原佳典

**研究対象** 本研究は、地域社会における歴史顕彰の歴史を明らかにする。具体的には、長野県安曇野市三郷中萱地域における、1686（貞享3）年の‘貞享騒動’の歴史顕彰を研究対象とする。歴史を顕彰するとは、過去の出来事に対して何らかの意味づけをする行為の1つである。地域社会における歴史叙述の内容的変遷と、その社会的構成を明らかにすることが本研究の目的である。

過去の出来事に関する知識は決して客観的に形成されるものではない[Carr 1962]。さらに、歴史に関する知識を学ぶことには、「同じ過去を共有するものとして一体感や連帯感を獲得」[小関 1999:10]するという効果がある。したがって、歴史叙述の形成を研究対象とすることは、個人のアイデンティティ形成を社会の側から読み解く作業である。

**研究視点** 歴史を叙述する上で、ある部分を書き換えたり、強調したりすることは、それを受容する人が理解しやすい形に、情報を加工し提示することであると考えられる。これは「伝説の合理化」[柳田 1944:53]として理解できよう。この「合理化」が、歴史叙述のどの部分で行われるのか。「合理化」の発生を歴史叙述の内容に即した形で明らかにする必要があるのではないだろうか。

**研究方法** 近世から1990年代までに生産された、‘貞享騒動’に関する文献資料48点を、それが生産された年代にしたがって6つの時期に分類し、それらに対して内容分析を行った。全国の義民物語に共通して見られる5つの要素に対応する、6つの場面について、その叙述のされ方を計測した（Table1）。

Table1 義民物語の要素と‘貞享騒動’との対応表

共通要素	‘貞享騒動’に対応する場面
蜂起要因としての苛政	不作なのに年貢増徴
優れた出自と資質	打ちこわしと‘義民’たちの関わり
赦免使遅延	鈴木伊織
怨霊・祟り	傾いた城、事件後の水野家
女の存在	おしゅんへの注目

これら6場面は、「合理化」の結果として、‘貞享騒動’の叙述に現れていると考えたものである。したがって、「合理化」の発生を明らかにする本研究では、これらの場面について内容分析を行うことが有効であると考えた。

**分析結果** 上記の内容分析により、‘貞享騒動’についてこれまでに叙述されてきたことの内容的変遷を把握することができたと考える。たとえば、‘貞享騒動’の原因を、家臣らの専断に求める叙述は明治30年代以降にみられた。また、‘義民’の1人である小穴善兵衛の娘、おしゅんが注目されるのは1980年代以降であった。

しかしこれらの結果だけでは、なぜそのような変遷を辿ってきたのかを説明できない。明らかになった内容的変遷は、現実の行為としての‘貞享騒動’顕彰による「合理化」の結果である。したがって、内容分析の結果を、地域社会における‘貞享騒動’顕彰との関わりの中で検

討することが必要である。‘貞享騒動’の叙述において、「合理化」はどのような状況の下で、誰によってなされてきたのか。これらの問いを明らかにすることで、本研究で得られた分析結果が、これまでに蓄積されてきた‘貞享騒動’顕彰の歴史に新しい知見を加えることができるのではないかと。

**考察** 明治30年代に、「騒動」の原因として家臣らの専断が挙げられたのは、1898（明治31）年の神道護国教会の設立と関連したものだと考えられる。神道護国教会とは、貞享‘義民’らを祀る神社である。同教会の設立時、「騒動」勃発時の藩主水野忠直を合祀するという出来事があった[白木 2004]。すなわち、騒動の原因を藩主ではなく家臣らに帰責することで、水野忠直の責任を軽減する効果があったのではないかと。

1980年代に、おしゅんへの注目が見られたのは、その後の“人権枠組み”に繋がるものであると考えられる。現在、中萱地域には‘貞享騒動’を顕彰する施設として、貞享義民記念館（1992年開館）がある。筆者が2006年度に行った調査から、同記念館では‘貞享騒動’が、農民たちがその人権を守るために立ち上がった事件として顕彰されている。1980年代におけるおしゅんの叙述は、権利意識を持ち‘騒動’に参加する、積極的な人物として描かれている。つまり“おしゅんへの注目”は、1980年代から現在に至るまでの“人権枠組み”の形成に伴う「合理化」の結果であると考えられる。

近世の出来事である‘貞享騒動’の叙述には、その時々々の叙述主体や時代性の必要に応じて、様々な価値や意味が織り込まれてきた。ある思想や価値を伝達するために‘貞享騒動’を動員することは、中萱地域の人々にとって一定の説得力を持ってきたと考えられる。歴史に説得力を認め、それを求める人々の“歴史への心性”があったからこそ、中萱地域の人々は300年もの間、‘貞享騒動’を顕彰し続けることができたのではないかと。“歴史への心性”により伝承されてきた‘貞享騒動’顕彰は、それ自体が歴史を叙述するための“歴史資本”である。この“歴史資本”は、それまでに蓄積されてきた歴史叙述を元手に、新たな歴史叙述を行うためのものである点で“資本”なのである。中萱地域では、この“歴史資本”を利用することで、叙述主体や時代性の必要性に応え、それを「合理化」する形で‘貞享騒動’の叙述が実行されてきたのだ。

このような“歴史への心性”とそれに基づく歴史叙述といった側面から、‘貞享騒動’の叙述の歴史を描き出したこと。この点を本研究の成果として主張したい。

Carr E.H. 清水幾太郎（訳）1962 歴史とは何か 岩波書店／小関隆 1999 「コメモレイションの文化史のために」 『記憶のかたち』柏書房／白木新 2004 「貞享義民社の誕生—明治31年、神道護国多田教会の活動を中心として—」 信州大学教育学部卒業論文／柳田国男 1944 国史と民俗学 六人社